

優 秀 賞

# 業界の地位向上を目指して

(関 東) (有)新郷運輸 赤 城 伸 子

「うんてんしゅさん、バイバーイ!!!」

田舎に住んでいた小学二年生頃の私は、学校からの帰り道、国道を大きなトラックが通るたびに手を振るのが大好きでした。

トラックに手を振ると、ほとんどの運転手さんが笑顔で手を振ってくれるのです。嬉しくて何度も手を振りました。トラックの運転手さんは皆、大きくて強くて優しい存在なのだと、当時の私には輝いて見えました。

社会人となり職種をいくつか経験してきた中で見たトラックドライバーのイメージは、もはや小学二年生の時の憧れを打ち砕くものでした。頭はボサボサ、ヨレヨレのTシャツ、髭も剃らず、くわえ煙草で荷降ろし、足元はサンダル、乱暴な言葉遣い。

道路上でも車間を詰めて威圧したり、あおったりするトラックを見かけたりしました。こういうドライバーは、ごく一部ののだとわかっていても、「もうあの時のような優しい運転手さん達はいないのかもしれない。」と思うようになっていました。

時が経ち、縁あって今の会社の事務所に勤務することになりました。入社して十年、運行管理者になって五年が経ちます。運送業界のイメージは、安全性優良事務所の証であるGマークを取得する事業所が増え、道路上でもエコ運転に励むトラックが多く見られます。昔とは随分変わり、さわやかなイメージになりつつあると思います。

ところが、テレビ等で事件や事故のニュースが流れた時、容疑者の職業が運送業だと必ず「トラック運転手」と報道されます。「会社員」で良いのではないのでしょうか。そういうニュースを見るたびに差別感と憤りを覚えてしまいます。

トラックドライバーは国から道路の使用許可を頂いた緑ナンバーの職業運転手であり、運転のエキスパートですから、交通関係のニュースで「トラック運転手」と報道されることは仕方ないとしても、交通とは全く関係のない事件や事故で「トラック運転手」と報道されるのはどうしても納得がいかないのです。

トラック輸送が「日本の血液」と言われる所以は、トラックが走らなければ、生活に欠かせないものや命を守るものが隅々まで行き渡らなくなるからです。人間の身体に例えると血液が止まってしまうのと同じことなのです。それほど、重要な役割を果たしているのにもかかわらず、社会的地位が上がらな

いと感じるのは何故なのでしょう。

私が運行管理者になった頃、日本国内貨物輸送量のうち、91.8%をトラック輸送が担っており、日本の経済を支える「縁の下の力持ち」であると社長に教わりました。

しかし、そこで働く人達の労働環境は現在も苛酷です。コンプライアンスを、と言われても人手不足は続いていますし、労働時間についても積み込み先や降ろし先の状況によって、実際にはなかなか難しいというのが現状です。

それでも二十四時間、三百六十五日、物流は動いています。こうしたドライバーさん達の苦労の上に、今日の日本経済が成り立っているのだと思うと、本当に頭が下がります。

コンプライアンスも大事ですが、一番大事なことはドライバーさん達の生活や健康を守り、事故を起こさない環境を創ることではないでしょうか。

社長が良く言っている言葉ですが「運送はハードよりソフトが大事。トラックは正直、どのメーカーでも変わらないが、ドライバーの質ははっきり差が出る。」というのです。多くの経営者はCS（顧客満足）ばかりを強調していますが、弊社の社長はES（従業員満足）が無ければCS（顧客満足）など有り得ない、というのが経営方針です。法令や賃金だけでは労働環境の整備は出来ません。労働時間の縮小や、健康管理のサポート、教育も大事です。二十四時間点呼を実施している中で、コミュニケーションを大事にし、労働環境の改善に活かせる体制づくりを心がけていきたいと思っています。

先日、ドライバーさんと話をしていたらこんな報告がありました。

「信号のない横断歩道で、保育園の先生を先頭に園児達が手を上げて待っている姿を見て、止まったんです。そうしたら、横断歩道を渡りながら、

“うんてんしゅさん、ありがとう～！！”

と園児達が手を振ってくれたのです！可愛くて、嬉しくて、私も手を振りました！」と、喜々として話してくれました。

私が小学二年生の時に手を振った運転手さんも、嬉しかったらどうか、と考えると懐かしい気持ちで胸のあたりが温くなりました。

トラックのドライバーは、やはり大きくて強くて、優しい存在でいてほしい。子供の頃の憧れは、今は目標となっています。

職業ドライバーである私達の業界から襟を正し、一般ドライバーの手本となるようなマナーの良い運転をしていくことによって信頼を得、あこがれる職業として選ばれる魅力のある業界になっていけたら、労働環境も充実し、事故はもっと減らせるはずで、業界のイメージアップ、地位の向上のため、これからは縁の下の力もちを支えていきたいと思えます。